慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	風神雷神図の系譜 : ボストン美術館蔵千手観音二十八部衆風神雷神図について
Sub Title	Thunder-God and Wind-God, in works of art : painting of thousand-armed kannon and its 28 attendants, in the collection of the Boston Museum of Fine Arts
Author	衛藤, 駿(Etoh, Shun)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.53- 63
JaLC DOI	
Abstract	The images of the thunder-god and wind-god are seen as the attendants of the thousand-armed kannon in the medieval Buddhistic paintings in Japanese art. The most original goes way back to the Han dynasty in China. Thousand-armed kannon and its 28 attendants, illustrated here, in the collection of the Boston Museum of Fine Arts, dates from 13th century. In this article, I tried to inquire into the characteristic of the thunder-god and the wind-god represented in this painting.
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

風神雷神図の系譜

—ボストン美術館蔵千手観音二十八部衆風神雷神図について—

Thunder-God and Wind-God, in Works of Art

—Painting of thousand-armed *kannon* and its 28 attendants, in the collection of the Boston Museum of Fine Arts—

衛　藤　　駿
Shun Etoh

Résumé

The images of the thunder-god and wind-god are seen as the attendants of the thousand-armed *kannon* in the medieval Buddhistic paintings in Japanese art. The most original goes way back to the Han dynasty in China. Thousand-armed *kannon* and its 28 attendants, illustrated here, in the collection of the Boston Museum of Fine Arts, dates from 13th century. In this article, I tried to inquire into the characteristic of the thunder-god and the wind-god represented in this painting.

風神雷神図といえば，すぐに宗達の二曲屏風一双（建仁寺蔵）が想起される．それは日本美術の特色がもっとも純粋且つ大胆に発揮されているものとして内外に著名であり，云わば日本美術の代表作の一つである．

この日本を代表する画家宗達が選んで風神雷神という主題は，実は東洋美術の長い歴史の中に培われてきた伝統的な題材である．ここでは東洋美術における風神雷神図の全貌について記述する余裕はないが，日本におけ

建仁寺蔵・風神雷神図屏風・宗達筆・二曲一双

る風神雷神図を考える上にもっとも重要と思われる千手観音二十八部衆の眷属としての風神雷神図について，その現存資料の一つである米国ボストン美術館蔵千手観音二十八部衆図[1]の紹介を行い，併せて東洋美術における風神雷神図の系譜について一応の概観を試みることとしたい．

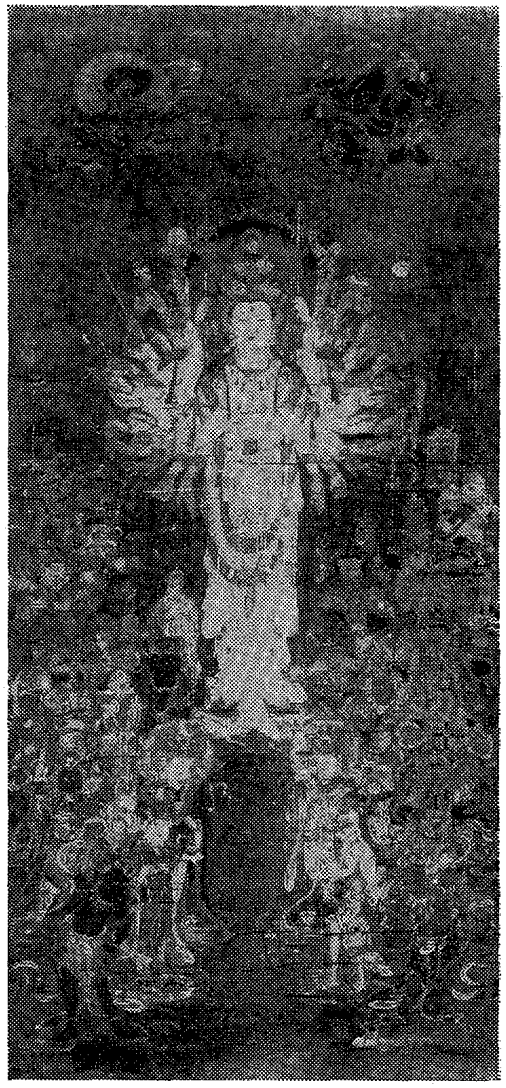
宗達の風神雷神図が，その主題および形姿を弘安本系北野天神縁起絵巻中の雷神図から得ていることは既に指摘せられている．このことは同じ宗達の，御物扇面貼交屏風中の雷神図などの存在からも立証されるものであって，何れも菅原道真の怨霊が清涼殿の公卿たちを襲う雷公としての姿であり，大和絵に登場した古典的題材を新感覚によって再構成したものである．

では一体，このような大和絵の中に描かれた風神雷神の出所は何処かといえば中世の仏画であり，風神雷神という主題については千手観音二十八部衆図に登場する眷属としての風神雷神である．

この千手観音二十八部衆図は，通常千手観音曼荼羅と呼ばれているもので，千手観音を本尊とし，周囲にその眷属二十八部衆を配した図像で，平安時代後半[2]から鎌倉時代を通じて盛行したものである．現存する主な作例

としては，浅野家本(国華五四六号)，村山家本（国華六五五号)，鹿島家本(菅原家旧蔵）およびここに新たに紹介するボストン美術館蔵本（以下ボストン本と呼ぶ）などを挙げることができる．

これらの千手観音曼荼羅における本尊には，立像，坐像の両種があり，眷属の二十八部衆については必ずしも経軌と一致しないものがある．つまり経に依れば風神雷神は二十八部衆以外のものになっているが，この二神を合わせて二十八部衆となす図像もあり，ボストン本は前者の例である．



ボストン美術館蔵・千手観音
二十八部衆風神雷神図

ボストン本は，仁和寺本別尊雑記に記載されている唐本という註記のある図像[3]（以下仁和寺別尊雑記本と呼ぶ）と像容はほぼ一致している．この仁和寺別尊雑記本には千手観音曼荼羅とは付記されていないので，この種の図像を千手観音曼荼羅と称することは恐らくは俗称にすぎないものと思われる．しかしこの図像が明確な経軌による規定通りに画かれたことは云うまでもないが，現存作例相互間には若干の差違がある．すなわち前述したように，ボストン本の如く風神雷神を二十八部衆以外とするものと，仁和寺別尊雑記本をはじめ，浅野家本などのようにこの二神を合わせて二十八とするものとがある．しかし本尊の印相や持物，標幟などは殆ど同じであり，部衆を半分ずつ左右に配列し，上方

仁和寺本別尊雑記千手観音図像

天空中に風神雷神を独立させている点は各本に共通している．

ボストン本における本尊の面貌をはじめ部衆の装束などには大陸新来の様式が認められ，これが中国画像の直模であることが強く想像される．従って二十八部衆は伴っていないが永保寺蔵千手観音図(国華三二一号)にみられるような宋時代仏画を直接の手本として筆写したものと考えられ，因みに中国における二十八部衆の造像は，入唐求法巡行記第二に，五台山竹林寺に二十八天釈梵王像を安置した記録があり，これら諸像の製作が認められ，二十八部衆の個々の描写様式にも同様の特徴を認めることができる．

一方，村山家本は同じ大陸的様式ではあるが，本尊が坐像である点が異っている．しかし部衆の姿態はかなり静止的であり，面貌の類型的な点もボストン本と共通しているが，ボストン本における部衆の表情や身振りはやや大行である．そして彩色および截金は装飾化され，かなり精密なところがあり，平安仏画に比してやや濃厚である．このことはボストン本が中国仏画の直模からすすんで，かなり日本的に消化した時期のものであることを示している．図像的に仁和寺別尊雑記本と比較した場合，ボストン本においては本尊および部衆が岩座の上に起立している点は一応共通しているが，本尊の光背は仁和寺別尊雑記本のような舟形光背ではなく，蓮台も

小さい．ここで注目すべき相異は風神雷神の取扱いである．その形姿は殆ど同じであるが，それらが乗っている雲が，仁和寺別尊雑記本では下方左右の部衆群から上方の天空に向って発生しているのに対して，ボストン本のそれは，上方より下行している点である．一般に日本製作にかかる千手観音曼荼羅中の風神雷神は一様に上方より飛来したように描写されているのであって，あたかも千手観音は風神雷神の災いを守護する本尊であるかのようにみえるのである．仁和寺別尊雑記本の風神雷神はあくまで眷属としてのそれとして描かれている．この相異については後述するが，風神雷神に対する中国と日本における考え方が全く別個の発展を辿っていることを暗示していて興味深い．ボストン本は前述の如き内容，描法，彩色から判断して鎌倉時代，13世紀の製作とすることが至当と思われ，類品中の優品として特筆せらるべきものである．

ではここでボストン本を中心に，所謂千手観音曼荼羅に登場する風神雷神についての考察に入ろう．

ボストン本における風神は，焔髪，開口，牙をむき出し，赤い裸体に肩布，天衣をかけ，腕釧臂釧をつけ，肩上に風袋を負い，左膝をついて雲にのる．一方雷神は焔髪，開口，牙をむき出し，青緑色の裸体に肩布，臂釧をつけている．左右の手に桴を持ち，右膝をついて雲にのり身体の周囲に太鼓八箇をめぐらしている．ところでこの風神雷神と二十八部衆との関係であるが，二十八部衆の名称は儀軌によって相異がある．すなわち唐の善無畏訳千手観音造次第法儀軌[4]，定深撰千手観音二十八部衆形像名号秘釈[5]，および東寺観智院本寛信写千手観音二十八部衆[6]の三つの伝本と，蓮華王院三十三間堂に現存する二十八部衆風神雷神像[7]に拠ってボストン本の図様を考察してみよう．以上四群の二十八部衆において前三者の伝本では，名称，形態に比較的相異が少く，後者の現存彫像においてその相異が著しい．結論的にいえばボストン本のそれは三十三間堂現存彫像に近いところから，

この像容は所謂新様のものであり，前記村山家本，浅野家本などと同様であり，千光寺本通称千手観音曼荼羅，京都慈照院本二十八部衆双幅，および法起寺蔵千手観音二十八部衆，南法華寺蔵千手観音像，近江常楽寺蔵徳治・延慶・正和銘二十八部衆像も同列にある．何れも日本には鎌倉期以降に伝写された新様の図像である．従って仁和寺別尊雑記本に記載のある唐本なる名称は，むしろ新様である宋本の意に解すべきであろう．

この新様図像にあって風神雷神は，二十八部衆以外に独立して虚空において本尊を守護しているような姿になっている．この点が旧図様ともっとも異っている点であり，ここに至って日本にあって古来畏怖せられていた風神雷神が，中国伝来の形姿によってイメージ・アップされると同時に，十一面観音や千手観音信仰と結びついて，自然の威力としての象徴である風神雷神の守り本尊として崇められ，やがてそれら観音によって懐柔され，その眷属から独立して，逆に本尊の守護神としての役割りを果すに至ったものと解され，千手観音二十八部衆における旧新の図像もまたそれを裏付ける如き様相を呈しているのである．

かくして仏法の味方になった風神雷神は，それ自身独立して信仰の中に生きることになる．それは観音を本尊とする浅草寺のように，仁王門の外に更に風雷門を設置し，雷門という名所にまで発展した次第である．一方古来民俗説話の中に登場していた雷は，その姿態のイメージを中国伝来の図様に求め，降魔，怨霊としてその形姿を持続することになる．

日本の場合，古い怨霊の要素が，雷電現象と重っていて，原始的には一種の神意の現われとして怖れられていたのであるが，一方五穀豊饒をもたらす風雨の恵みもまたこの力によるものであるところから，仏教，就中金光明最勝王経[8]において，従来中国において発展をみせていた風神雷神のイメージは，仏の支配下において忠誠を誓う擬人的な姿としての風神雷神として登場するのである．そして奈良朝以来，比較的偏地に，あるいは密教的本尊として信仰をあつめた千手観音は，やがて風雷の守護神としての本

尊から，一歩進んで風神雷神を眷属として二十八部衆と共にその配下に従えた姿としての像容へと発展したのであろう．かくして中国から移入された風神雷神のイメージは，一方で日本古来の御霊乃至は怨霊としての役目を果しながら，大陸において成立し変貌してきたところの，擬人化され，滑稽味をもった姿態となった．それは人というよりは鬼形に近いものであり，雷神には連鼓を，風神には風袋をもたせて虚空を疾駆する姿になっている．

以上の如き風神雷神の形姿を，中国における実例の中に求めたものに，松本栄一博士の優れた論説（国華四六八号・東洋古美術に現われた風神雷神）がある．今その主なものを列記してみよう．

年代順にみれば先ず後漢・武氏後石室三石第二段画象石，大統四年以前・敦煌莫高窟一二〇N洞天壁画，唐五代・同じく莫高窟第一四〇洞奥壁仏龕上部および第一四〇洞右壁変相中，同じく第一一七奥壁左上隅のもの，唐代・スタイン莫高窟将来絹本仏画断片（連鼓鬼形）の諸例があり，彫刻としては棲霞寺舎利塔釈迦八相降魔部に例がある．

松本氏の論説は，長阿含経や金光明最勝王経に説く四雷神の考えと，ギリシャ神話にある四風の思想との関連を示唆した悠大な規模をもった考察であるが，この様な風神雷神という只一つの主題にも，長い歴史と巾広い思想的背景があり，多種多様な様式の変遷過程をもっていたことがわかる．

一方，日本における風神雷神図については，報恩院本過去現在絵因果経降魔の段(9)の中に同種のものを認めることができるが，これは降魔一般の例としての存在の域を出ず，風神雷神として独立的に自覚せられていない．しかし中尊寺大長寿院にある金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅第八・第九塔に登場する風神雷神は，千手観音曼荼羅に出てくるそれと極めて近い姿である．ここでは風雨が順調であることをつかさどるものとして，吉祥天

と共に描かれているのである．すなわち金光明最勝王経は法華経と共に日本では仏典の中心的なものとして信仰され，奈良朝では主として吉祥悔過による五穀豊饒，国土の安楽を願うために，国分寺造立と同じく金光明経によって吉祥天像を国ごとに祀ったのであり，その際五穀豊饒をもたらすもっとも重要な要素である風雨というものを形象化したものが風神雷神であり，その姿態は千手観音の眷属としてのそれに酷似しているのである．

日本上代における自然信仰の様相をみても，雷に対する畏怖の感情と，その恩恵にすがる気持の，如何に大なるものがあったかは，日本書紀[10]や霊異記[11]をもち出すまでもなく，説話の中に多くの例が見出される．しかしこの日本固有の風神雷神思想は，中国のそれから大きな影響を受け，その形態的イメージを与えられたのである．かくして日本における風神雷神は，仏鬼軍絵詞(京都十念寺蔵)，北野天神縁起絵巻弘安本をはじめ，蓮華王院三十三間堂彫像および千手観音曼荼羅中にあって，すべて中国伝来の形態をとっている．もちろん宗達のそれも同様であり，今日日本美術の代表作として喧伝されている風神雷神という主題の源泉は，遠く中国漢代にさかのぼり，その変遷は長い歴史を有しているのである．

現存する風神雷神の彫像としてもっとも古い作例は，前記蓮華王院の二尊である．岡直巳氏の論文（大和文華二四号・三十三間堂の二十八部衆と風神雷神）によれば，これらの彫像は建長年間の同寺再興に際して造像されたものと解され，ここに至って従来の儀軌にあって二十八部衆中の尊像であった風神雷神が，二十八部衆以外に虚空において守護に当るという意想のものに造像され，以来風神雷神像は独立して千手観音を主尊とする天台系寺院に遺存例を見出すのであって，あたかも仁王のように寺院の主門内に安置されること，前述の浅草寺雷門の如くである．

なお，絵画彫刻以外に風神雷神をモティーフとしたものに雷神文磬[12]（東京国立博物館保管旧法隆寺献納御物）がある．これは磬としてはやや異形

で雲版形のものである．磐それ自身の変遷と平行して，この主題が中国から伝来し日本に土着化したことを裏付ける上に見逃せない資料である．

(1968. 4. 10)

本論の中心であるボストン美術館蔵千手観音二十八部衆の調査および本誌への掲載許可については，同館亜細亜部のフォンテイン部長，ならびに堀岡智明氏より種々の御高配を賜った．堀岡氏は守屋教授滞独時代の御友人で，同じ宿舎にて起居を共にされたこともあった由である．この堀岡氏の御協力によって完成したこの小論が，守屋教授の古稀記念論文集に収録されたことは，美術がとりもつ一つの機縁と申すほかなく，改めて前記諸氏の御芳情に深謝する次第である。

(大和文華館学芸部課長・京都市立美術大学講師)

註

(1) ボストン美術館蔵千手観音二十八部衆図　絹本金地著色　竪71,5糎　横33,糎
同美術館における本図に関する要項記事は下記の通りである．
08.140 B. F.,A.
Kamakura Buddhist
Thousand armed Kwannon with twety-eight attendant divinities.
Full gold & colour.
Silk panel .715×.324m E. M. C. 269, 08 A 198.2.
Early 13th century or late 12th. Fine work. Kasuga school
Purchased by Okakura in Japan, 1907, with Special Japanese Fund,
Rec'd Jan. 1808.

(2) 吾妻鏡第8・文治5年9月「次に千手堂，木造二十八部衆あり，各金銀を鏤するなり」.

(3) 大正蔵経図像3巻154頁・図像54．例えば高雄曼荼羅白描本千手千眼観音(高山寺旧蔵・酒井家蔵)には，婆藪仙と功徳天が本尊を夾侍し，須陀会天が飛天のように上方左右に配されている．この飛天と風神雷神との関係は興味深く今後の課題として特記して置く．

(4) 1・密迹金剛士　2・鳥芻君荼央倶尸八部力士賞迦羅　3・摩醯那羅達　4・金毘羅陀迦毘羅　5・婆馺婆樓那　6・満善車鉢真陀羅　7・薩遮摩和羅　8・鳩蘭単吒半祇羅　9・畢婆迦羅王　10・応徳毘多薩和羅　11・梵摩三鉢羅　12・五部浄居炎摩羅　13・釈王三十三　14・大弁功徳娑恒那　15・提頭頼吒王

16・神母女等大力衆　17・毘樓勒叉王　18・毘楼博叉王　19・毘沙門天王　20・金色孔雀王　21・二十八部衆大仙衆　22・摩尼跋陀羅　23・散脂大将弗羅婆　24・難陀跋難陀　25・修羅　26・水火雷電神　27・鳩槃茶王　28・毘舎闍

（5）　定深が伽梵達摩訳千手千眼観世音菩薩広大圓満無礙大悲心陀羅尼経について古千手経，新千手経，大宋新模千手経の三本を定深が考証したものである．定深は天仁（1108）頃の人で，建久9年（1198）4月僧永真が東寺で書写した本に拠る．

1・密迹金剛士鳥芻君荼鴦倶尸　2・八部力士賞迦羅　3・摩醯那羅達　4・摩醯温縛羅　5・金毘羅陀羅　6・満善車鉢真陀羅　7・薩遮摩和羅　8・鳩蘭単吒半祇羅　9・畢婆迦羅王　10・応徳毘多薩和羅　11・梵摩三鉢羅　12・五部浄居炎摩羅　13・釈王三十三　14・大弁功徳娑恒那　15・提頭頼吒王　16・神母女等大力衆　17・毘槽勒叉王　18・毘樓博叉毘沙門　19・金色孔雀王　20・二十八部大仙衆　21・摩尼跋陀羅　22・散指大将弗羅婆　23・難陀跋陀　24・婆伽羅竜伊鉢羅　25・修羅乾達闥婆　26・迦樓緊那摩睺羅　27・水火雷電神　28・鳩槃荼王毘沙闍

（6）　1・密迹金剛士　2・八部力士　3・摩醯那羅那　4・金毗羅陀　5・波馺婆楼那　6・満善車鉢真陀羅　7・薩遮摩和羅　8・鳩蘭単吒　9・畢婆迦羅王　10応徳毗多薩和羅　11・梵摩三鉢羅　12・炎摩羅　13・釈王　14・大弁功徳天　15・提頭頼吒王　16・神母女等　17・毗樓勒叉王　18・毗沙門　19・金色孔雀王　20・大仙衆　21・摩尼跋陀羅　22・散指大将弗羅婆　23・難陀跋難陀　24・婆伽羅竜伊鉢羅　25・修羅乾闥婆　26・迦樓緊那摩睺羅　27・火雷電神　28・水雷電神

（7）　1・密迹金剛士　2・摩醯首羅王　3・那羅延堅固　4・金比羅　5・満善車王　6・摩和羅王　7・畢婆迦羅王　8・五部浄　9・帝釈天　10・大弁功徳天　11・東方天　12・神母天　13・毘樓勒叉　14・毘楼博叉　15・毘沙門天　16・金色孔雀王　17・婆藪仙人　18・散指大将　19・難陀竜王　20・沙迦羅王　21・阿修羅王　22・乾闥婆王　23・迦樓羅王　24・緊那羅王　25・摩喉羅王　26・雷神　27・風神　28・大梵天王　29・金大王　30・満仙王

（8）　金光明最勝王経巻第一序品第一「――大雲日蔵菩薩，大雲月蔵菩薩，大雲星光菩薩，大雲火光菩薩，大雲電光菩薩，大雲雷音菩薩，――如是等無量大菩薩衆，各晡時従定而起，住詣仏所，頂礼仏足云々．」

金光明最勝王経巻七如意宝珠品第一四「仏言，汝等諦聴，於此東方有光明電王，名阿揭多，南方有光明電王，名設羝嚕，西方有光明電王，名主多光，

北方有光明電王，名蘇多末尼」。

(9)　過去現在絵因果経巻第三「魔益愁忿懟，更増戦力，菩薩以慈悲力故，令抱石者，不能勝挙者，不能得下，飛力舞剣，停於空中，電雷雨火，成五色華，悪竜吐毒，変成香風，云々」

(10)　日本書紀巻一「一書曰，伊弉諾尊与伊弉冊尊共生大八洲国，然後伊弉諾尊曰，我所生之国，唯有朝霧而，満之哉，乃吹撥之気化為神，号曰級長戸辺命，亦曰級長津彦命，是風神也，云々」.

日本書紀巻一「――所謂八雷者，在首曰大雷，在胸曰火雷，在腹曰土雷，在背曰稚雷，在尻曰黒雷，在手曰山雷，在足曰野雷，在陰上曰裂霊」.

(11)　霊異記「雷を捉ふる縁」

(12)　「磬」(大正10年・工芸美術会発行・163図)